

「
I
M
A
S
A
R
A
」

今野和人

登場人物

入山諒介(18) (21) 大学生

藤谷美樹(21) 大学生

斉藤雅史(23) 大学生

増田悟(21) 大学生

横川奈月(20) 大学生

入山容子(48) 入山の母

入山慎(50) 入山の父

入山隆二(17) 入山の弟

美沙(21) 大学生

沙織(21) 大学生

前田(38) (41) ファミレス店長

本部社員(55) ファミレスの四国地方本部社員

店員 ファミレスの店員

○大学正門の桜並木

T「2023年」

学生たちの声。

○同・構内

学生たちがサークルの新生勧誘の呼び込みをしている。

入山諒介（21）が勧誘を横目に力なく歩く。

斉藤の声「その君、4年生？」

入山が振り返ると、勧誘の列の端に斉藤雅史（23）とマスクとゴーグルをした増田悟（21）がビールケースの上に座っており、手招きしている。

2人の前には「IMASARA」と書かれたボール紙がある。

入山が不審がりながら近づく。

斉藤「4年生？」

入山「はい」

斉藤「おお、じゃうちのサークル入らな

い？」

入山「いや、今更」

増田が「IMASSARA」の紙をかか
げる。

斉藤「うん、今更はじめよう」

入山「え？」

○タイトル「IMASSARA」

○大学・食堂

学生たちでにぎわっている。

隅の席に斉藤と増田が並んで腰掛け、

向かいに入山が座っている。

斉藤「大学入ったらしたいことあるじゃない。

合コンだったり、ピアスしてみたり（ピア

スをした耳をさわる）、あとなんだ」

増田「バーベキューとか？」

斉藤「そうそう、旅行したり、そういう楽し

いの」

入山「まあ、はい」

斉藤「それを4年になって今更やってみよう
というのが、このサークル」

入山「(嫌そうに)ええ？」

斉藤「ある？ バーベキュー？」

入山「ないです」

斉藤「いいの？ 終わっちゃうよ、大学生
活」

入山「別に、そういう大学デビューみたい
の」

斉藤「あ、そういうのじゃなくてもいいの。
人それぞれ今更があるから」

入山「ああ……」

増田「僕は少し前、今更進撃の巨人を一気見
しました」

入山「あ、今更」

斉藤「コロナもあって、この数年したくても
できなかったことあるでしょ」

入山「まあ」

斉藤「でも急にがつつくの恥ずかしいじやな
い」

入山「ですね」

斉藤「でもそれがサークルだとしたら？」

入山「え？」

斉藤「サークル活動なんだから、堂々とできるじゃない」

入山「……そうですかね」

斉藤「そうやって各自今更を経験して、研究しようというのがこのサークル」

入山「研究？」

増田「みんなで話し合うだけです」

入山「ああ」

斉藤「文化祭で発表もするよ」

入山「ええ？」

斉藤「恥ずかしいと思ったでしょ」

入山「いや」

斉藤「すごい意義あるからね。コロナだけじゃない、病気とかで休学する学生もいるんだし」

入山「ああ」

斉藤「いつ、自分らしく楽しんでもいいとい

うメッセージを我々は伝えてるわけ」

入山「われわれって、ほかには」

斉藤「まあ、今は2人なんだけどね」

増田「入会できるのは4年生だけだったんで」

入山「3年はだめなんですか」

斉藤「3年は今更感弱いね」

増田「ただ、昨年から3年の後期から入会で
きるようになったんで、僕はそこで入りま
した」

斉藤「俺は4年から入って留年して、まだ続
けてる。何か質問は？」

入山「……週何回活動？　するんですか」

斉藤「みんなが集まるのは週2回で、あとは
自由に今更をやればいい。どう？」

入山「んー、いや、ちよつと、考えさせてく
ださい」

○入山の実家のマンション・外観（夜）

○同・リビング（夜）

入山 慎（50）と入山 容子（48）と
入山が食卓で夕飯を食べている。

慎「隆二は？」

容子「帰ってない。デートじゃない？」

慎「ああ」

容子「……就活は？」

入山「ん」

容子「進んでる？」

入山「あんま」

入山、食器をもって立ち上がる。

○同・入山の部屋（夜）

黙々とパソコンでデータ入力する入山。
ふと入山は大学のホームページを開く。

○大学・本部棟のラウンジ（数日後・朝）

イスに座る入山と斉藤。目の前を学生
たちが行き交う。

斉藤「うれしいよ。なんで入ろうと思った

の」

入山「家でデータ入力のバイトをやってたら……なぜか、今更大学の寮に入れないかなって調べちゃったんです」

斉藤「いいね。4年から寮生活」

入山「まあ、1年じゃないと無理だったんですけど」

斉藤「ま、これから自分なりの今更をやっついこうよ」

入山「はい」

斉藤「3人いれば、合コンできるな。したことないでしょ」

入山「ええ、やっぱりそう見えますか」

斉藤「うん。うちと同じIMASARAのサークルがある女子大があってね」

入山「え、今更って流行ってるんですか？」

斉藤「そんなわけないでしょ」

入山「ですよね」

斉藤「女子大にも今更を抱えた人たちがいるってだけ。そことセッティングするから」

入山「合コンは僕別に」

斉藤「そんなイケイケの子はこないよ？ て
いうか、イケイケの子って今言う？」

入山「あんまそういうのわかんないです」

斉藤「とにかく今更をする子たちなんだから、
まずいい子でしょ」

入山「まあ」

斉藤「サークルのルールでもある。誰かがし
たいことは協力する。俺は合コンしたい。
その代わりに、君の今更に助けが必要なら協
力する」

入山「わかりました」

斉藤「で、何かしたいことある？」

入山「……あの、本当におしやれたいとか
でなく、もてたいとかでもないんですよ。
ただ直毛だとセットが大変なんで——」

○美容院・外観（夕）

斉藤と入山が中の様子を見ている。

斉藤「俺がついて行けるのはここまでだ」

入山「ありがとうございます。1人だと逃げ
てたと思います」

斉藤「気楽に。誰も気にしてないから」

○同・席（夕）

美容師「今日はどんな感じにしましょう」

入山「（スマホを出して）こんな感じにした
いんですけど」

店員「いいですか（スマホを借り）、あ、こ
のタレントさん、今はけっこう違いますけ
ど」

入山「（赤面し）そのころがいいんです、今
更ですけど」

○入山の家・リビング（夜）

入山隆二（17）と容子が夕飯を食べ
ている。

入山がリビングに入って冷蔵庫を開け
てお茶をとると、容子が入山の頭をじ
っと見て、

容子「あれ、パーマ？」

隆二が入山を見る。

入山「いや、直毛だとまとまらないから。おしやれとかじゃなく」

容子「いいじゃない。就活でも印象大事だし」

入山、お茶をもってリビングを出る。

隆二「（ニヤニヤしながら）今更」

○居酒屋・外観（数日後・夜）

斉藤「じゃあ、入山くんの入会を祝って乾杯」

○同・個室の座敷（夜）

入山と斉藤と増田がグラスを合わせる。

斉藤「でさ、今日オールしよっか」

入山「え？」

斉藤「俺、オールしたことなかったんだよね、だから今更」

増田「オールかあ」

斉藤「ルールルール」

入山「(スマホ出し) 親に今日帰らないって
連絡するのはじめてかも」

斉藤「いいねえ」

○入山の家・リビング(夜)

ソファで慎がテレビを見ている。

容子がスマホを見ながら近づく。

容子「お父さん、大変大変」

慎「え？」

容子「諒介が友達と飲むから今日帰らないつ
て」

慎「友達いたのか」

容子「……嘘かな？」

慎「ま、たまには嘘もいいな(グラスを傾け
る)」

○居酒屋・個室の座敷(夜)

斎藤が勢いよくビール飲む。

斉藤「俺は大学デビューしたかったのよ」

入山「はい」

斉藤「でも怖かった。田舎ものだし。で、1年の後半からコロナがきたんで言い訳にした。今はしゃぐのはおかしって」

入山「あゝ（ハイボール飲む）」

× × ×

三人がポテトや唐揚げつまみながら笑う。

斎藤「さからだから、今更ピアス開けて、今更バーベキューもしたの。いいでしょ？いいよね？」

入山「いいと思います」

× × ×

時計が12時を差す。

増田がカルピスサワーをマスクをつまみあげて飲む。

増田「肺に基礎疾患があるんで、怖くて」

入山「ああ」

増田「1人だけ友達いたんだけど、そいつが退学。実家のレストランがコロナでつぶれ

て」

入山「最悪だな」

増田「急におびえてる場合じゃないなって。

今更でもやりたいことやろうって」

入山「どんなことやったの」

増田「免許とったり、ボランティアしたり、

読書会に出たり」

入山「すごい、まじめ」

斉藤「否定はしない。ただ遊びの方が今更何

やっつてんだよって思うでしょ」

入山「思います」

斉藤「それがいい。乾杯！（3人グラスを合

わせる）

× × ×

斎藤は顔が赤くなっておりゲップする。

増田「汚いなあ」

斎藤「今更いうなよそんな。で、（入山

に）大学生活どうだったの？」

入山「僕は……なんでしようね（枝豆に手を

伸ばす）」

増田「無理に言わなくても」

斉藤「そうそう」

入山「（酒を飲み）いや、大丈夫です。1年のころ、ファミレスでバイトしてたんですけど」

斉藤「うん」

入山「その店長にパワハラっていうか、まあいじめられたというか、とにかくつぶれちゃって……2年くらい通院して」

斉藤「大変だったね」

入山「今は割と平気なんですけど……パニック障害っていう、あの、過呼吸とか起こす病気になって」

斉藤「わかるわかる」

入山「気づいたら3年で、単位もあんまとれてなかったんで、ただ授業出てたんですけど。なんか4年になったら全然就活する気なれなくて」

斉藤「うん」

入山「すいません、なんか暗い話」

斉藤「いや、いいよ。こうやってき、心を開くのが青春じゃない？」

増田「青春ってまとめはちよつと」

斉藤「あ、ごめん」

入山「全然。人に話したことなかったんで、すつきりしたというか」

斉藤「よかったー。いい人入ったよ」

増田「で、合コンするんですか？」

斉藤「え、するよ。彼女ほしいもん」

増田「今は、マッチングアプリじゃないですか？」

斉藤「それがだめだから合コンするんだろ」

増田「僕はそんなに彼女とか」

斉藤「俺はほしいよ……（小声で）いたことないもん」

増田「僕もそうですけど」

入山「僕もです」

一同、しばし沈黙。

入山「いや、でも最近是她女いたことない20代のほうが多いってデータ見たんで、そ

んな恥ずかしがることでもないっていう

か」

離れで男女が飲み会してる声が聞こえ、

三人はその一団を見てしまう。

入山「……あの、僕高校生の弟がいて、弟彼

女いるんですよ」

斉藤「最悪だね」

入山「前、家帰ったら、弟彼女といて。気ま

ずくて2時間外にいたんですけど、2時間

後帰ったらまだいて」

斉藤「早く帰れよ、ど畜生が」

増田「そんな言わなくても」

入山「そういうその、ダサイ人生です」

斉藤「合コンやろう、ね、すぐやろう（ビー

ル飲み干す）」

○住宅街（早朝）

酔っぱらった斉藤の肩を入山と増田が

背負いながら歩いてくる。

斉藤「ああ、そこそこ」

入山「え？」

見るからに高級そうなマンション。

○斉藤が住むマンション・玄関（早朝）

入山と増田が斉藤を中に運び入れる。

斉藤は玄関で倒れる。

斉藤「泊まっていきな」

入山「いや、大丈夫です」

増田が中に入っていく。

入山「増田さん？」

○同・リビング（早朝）

広々としている。呆気にとられる増田と入山。

増田「金持ちっていう噂はあったけど」

増田、冷蔵庫を開けて、中から高そうなジュースを出してコップに注ぐ。

増田「だから留年もできるし、バイトもせず居酒屋でおごることもできるし、今更もでき（ジュース飲む）」

入山「なるほど」

増田「恵まれてるのに今更ってなんかね」

入山「まあ本人じゃないとわからない苦労とか」

増田「さっき大学辞めた友達の話したけど、そいつはほんと勉強熱心で」

入山「へー、すごい」

増田「勉強しないなら、大学入らなきゃいいのって思うんだよね」

入山「……なんかごめん」

増田「いや……でもまあ、ベッド運ぼうか」

入山「うん」

○同・ベッド（早朝）

に運ばれた斉藤。幸福そうに寝ている。

○大学・大教室（数日後）

教授が講義している。

教授「じゃあここまでで質問ある人」

一同沈黙する中、おずおずと入山が手

を挙げる。横川奈月（21）がその様子を見ている。

教授「あ、じゃあ君（入山を指す）」

× × ×

入山が片づけていると、横川が近づいてきて、

奈月「あの」

入山「はい」

奈月「横川といます」

入山「入山です」

奈月「わたし社会学部で、日本社会の同調圧力の研究をしています」

入山「ああ、はい」

横川「なんでさつき、質問したというか質問できたんですか？」

入山「え？」

横川「いや、日本人はこういう大人数がいるとき、一般的にああいうときあんま質問しないというか」

入山「ああ……今更ちよつと真面目に勉強し

てみようかと思って。うちの大学、I M A
S A R A っていうサークルがあるんですけ
ど」

横川「今更？」

○繁華街の居酒屋前（数日後・夜）

道行く人が多い中、入山と斉藤が待っ
ている。斉藤は見るからに新品の服装。

入山「そういえば、この前サークルについて
話したんですよ。（斉藤は全然話聞いてな
い）授業のあと、話しかけてきた人がいた
んでサークルの説明をつて全然話聞いてな
いですね」

斉藤「え？」

入山「僕もですけど、緊張してます？」

斉藤「増田が遅いからさ」

入山「あ、きましたよ」

増田、ゴーグルと前よりしっかりした
マスクをしている。

増田「お待たせしました」

斉藤 「いつも通りの重装備で」

増田 「怖いですから」

斉藤 「いいけど、顔見えないと不利だよ」

増田 「僕は彼女とかいいんで」

沙織 (21) の声 「中では外さない？」

美沙 (21) の声 「いや怖いんで」

入山たちが振り返ると、女性3人のうち、美沙がゴーグルとすっかりしたマスクをしている。

美沙 「基礎疾患あるって言ったのに」

沙織 「いや、全然いいけどね」

美沙 「じゃあ今更言わないですよ」

斉藤が近づき、

斉藤 「あ、もしかしてIMASARAの」

沙織 「あ、そうです。よろしくお願いしますま

す」

増田と美沙が見つめ合う。

○同・座敷(夜)

増田と美沙が向き合って仲良く話しあ

っている。

斉藤と入山は沙織と藤谷美樹（21）
と向き合っている。

斉藤「（増田と美沙を見て）まあ、そうなり
ますよね」

沙織「ですね」

斉藤「……あの、2人とも4年生ですか？」

沙織「ええ」

4人、沈黙。

斉藤「ゲームでもしましょうか」

入山「早くないですか」

沙織「……どういう今更をしたのか話すと

か」

斉藤「そうですね！　じゃあまず入山から」

入山「あ、はい。僕はサークルに入ったばかりで、その、今更あのパーマをかけたたり、
今更真面目に勉強しようとして授業中質問して
みたり、あとは……」

美樹「あ、わたし、同じです。わたしも思い
切って質問しました」

入山「え、え、あれ勇気いりますよね」

美樹「はい」

入山「質問したあと、全然話し入ってこないですか？」

美樹「ですよ。なんか質問した時点で達成感感じちゃって——」

沙織と斉藤、顔見合わせる。

× × ×

入山と美樹が並んで座っている。

入山「ほかに何しました？」

美樹「カメラ買いました。今更カメラ女子です」

入山「いいじゃないですか。僕、今更こないだのWBS見ましたよ」

美樹「ああ、先月、先々月？ 盛り上がった」

入山「見てる間、ずっと今更感ぬぐえなかったです」

美樹「（笑う）上級者ですね」

入山「いやいや、ベタに今更海とかも行きた

いですけど、1人はちよつと」

美樹「ああ、海いいですね」

入山「そのうち……みんなで」

美樹「ああ、ぜひ」

入山「でも、1人でできることってあんまないですよね」

美樹「……できてないんですけど、今更謝るとかもありかなって」

入山「謝る」

美樹「わたし高校のとき、友だちにひどいことしちゃって。それを今更だけど謝ればな」と

入山「なるほど、いや、それすごい」

美樹「すごくないですよ、謝っても受け入れてくれるかわかんないし」

入山「……逆に怒るとかもありですかね」

美樹「ありだと思います、なんかあるんですか」

入山「まあ、はい」

斉藤の声「あゝ、ボルダリングはちよつと今

更行く気にもなれないっていうか」

沙織の声「あ、そうですか」

沙織がうんざりした顔をしている。

斉藤「今更脱出ゲームとかどうですか？」

沙織「いや、それはあんま興味ないっていうか」

入山「みんな海は無理かもしれな

ね」

美樹「ですね。2人とかでも」

入山が美樹をどきまぎと見つめ、

入山「あの、よかったら連絡先」

美樹「はい」

2つのスマホが差し出される。

○大学の食堂（数日後）

斉藤と入山が向き合っている。

斉藤「（スマホを見て）増田はデートで来れないって」

入山「そうですか」

斉藤「俺、今更パチンコ始めたよ」

入山「どうでした？」

斉藤「全然出ない。3万すった」

入山「あら」

斉藤「今更タバコも始めたんだけどさ」

入山「荒んでませんか？」

斉藤「荒んでるよ。俺だけ彼女できなかった

んだよ」

入山「僕はまだつきあってないですよ」

斉藤「まだ？ まだって言い方の自信が嫌だ

ね」

入山「すいません、今のは調子乗ってたとい

うか」

斉藤「いいよ、今更人生を楽しむサークルな

んだから、いいんだけどね」

奈月の声「すみません」

斉藤と入山が振り返ると、奈月がいる。

入山「（斉藤に）あ、こないだ話した方で

す」

斉藤、奈月に見とれている様子。

入山「どうぞ座ってください」

奈月「失礼します（入山の隣に座る）」

入山「関心もってくれました？」

奈月「ええ。わたしもあんま人と関わらず

いたので」

入山「3年間ってあつという間ですよね」

奈月「え、あ、今3年なんですけど」

入山「あ、言っただけでなかったたっけ。3年

の後期からしか入れないですよ」

斉藤「いや、入れるよ、3年から」

入山「でも、3年じゃ今更感ないって」

斉藤「十分でしょ3年なら。どうした？」

入山「……」

斉藤「ようこそ、IMASARAへ。部長の

斉藤です」

奈月「横川奈月です」

斉藤「よし、歓迎会しよっか。ね」

○タピオカ専門店・外観（一週間後）

入山の声「斉藤さん、むちゃくちゃ張り切っちゃって、今更金髪にしたんですよ」

○同・店内

入山と美樹がタピオカミルクティーを
手元におき、向かい合わせに座ってい
る。

美樹「かわいいですね、斉藤さん」

入山「愛されキャラです」

美樹「……就活ってしてます？」

入山「うーん、いや」

美樹「話しちゃだめでした？」

入山「なんでやる気ないんだろいな」

美樹「(ストローの袋をいじりつつ)この間、

高校の友達に謝りたいって話を」

入山「ええ」

美樹「謝りに行ったんです」

入山「え、すごい」

美樹「でも言われちゃいました、もういいよ
って」

入山「……」

美樹「すごい口数少なくて……わたし、自己

満足でしかなかったなって」

入山「……ちなみに、高校のとき何しちやつ
んですか？」

美樹「言いません。あれです、墓場まで持つ
て行きます」

入山「大丈夫ですよ」

美樹「いや、嫌われたくないんで、本当に言
わないです」

入山「……了解です」

美樹「本当に今更だなーと（ストローの袋を
置く。袋の先が花になっている）」

入山「でも、なにか、なにかは伝わりました
よ、多分。それだけ謝りたい気持ちってい
うか。その友だちも、言葉にならなくても、
少しはつかえとれたんじゃないですかね」

美樹「だといいですけど」

入山「（ストローの花を見て）器用ですね」

美樹「単なる、癖です」

入山「……僕は今更怒りたい、謝ってもらい
たいことがあって（ストローの袋を指で小

さく丸める)」

美樹「この間言ってた——」

入山「昔、バイト先の店長からパワハラ受けて。まあ、いつまで囚われてんだみたいな気もしてるんですけど（丸まったストロウの袋を置く）」

美樹「被害者の人はいいんです、今更でも。

いつでも」

入山「そうですか」

美樹「怒ってください」

入山「あ、がんばります」

美樹「……そろそろ、敬語やめてみませ

ん？」

入山「あ、うん」

入山、タピオカをすする。

○大学の芝生（数日後）

齊藤と奈月と入山が座っている。

齊藤「じゃあ今後やりたい今更を発表しようか」

奈月「わたし、今更家庭教師のバイトを始めようと思うんですけど」

斉藤「すばらしい、似合ってると思う」

奈月「自分より下の子と話したことなくて」

斉藤「全然気にすることないと思うな」

奈月「斉藤さんはどういうバイトしてまし

た？」

斉藤「あ、バイトしたことない」

奈月「ああ……入山さんは」

入山「ここ数年、家でデータ入力しかやってない」

奈月「そうですか」

入山「増田さん、家庭教師のバイトやってま

せんでした？」

斉藤「ああ、あいつそうか。聞いてみるか」

奈月「ありがとうございます」

斉藤「あれだよ、増田は彼女いるからね、つ

きあいたての」

奈月「え、あ、はい」

斉藤「入山は？ 今後の予定」

入山「前、バイト先の店長にパワハラされた
って話したじゃないですか」

斉藤「ああ」

入山「今更、怒りたいし謝ってもらいたいん
ですけど、どうするか考え中です」

斉藤「すごいな。今更の概念を押し広げよう
としてる」

入山「いやいや、こないだ知り合った藤谷さ
んにそういうのもありじゃないって」

斉藤「（つまらなそうに）なんだよ」

奈月「でも、パワハラする人ってパワハラの
自覚ないですよね、多分」

斉藤「そうなの？」

奈月「パワハラ経験はないですけど、セク
ハラはちよくちよくありますから」

斉藤「え？ どういう」

奈月「あんまいいたくないです」

入山「……ということは、やっぱ謝らない
か」

奈月「裁判とかすれば別ですけど」

入山「裁判は、音声とかもないし」

斎藤「あ」

斎藤が目の前に転がってきたボールを
かっこつけたフォームでキャッチボ
ルしてる学生に投げ返す。ボールを目
で追う入山。

ボールが弾む音が先行し――

○公園（夜）

コンクリート壁に向かって繰り返して
ニスボールを投げる入山。

○ファミレス・外観（数日後）

○同・レジ前

入山が店員を前にしている。

店員「すみません、前田さんはほかの店舗に
移りました」

入山「そうですか……当時のお札をどうして
もいいたいので、どこの店舗に移ったか教

えてもらえますか？」

店員「あー、ちよっとお待ちください。入山さんの下の名前もよろしいですか」

入山「諒介です。(スマホ操作し) こういう字です(スマホ見せる)」

店員「あ、少々お待ちください」

店員がバックヤードに引っ込むのを入山は見る。

○同・バックヤード(入山の回想)

前田(38)が入山(18)に詰め寄る。

入山「すみませんでした」

前田「死ねよ、マジで」

入山「……」

前田「誰でもできると思ってるんでしょ、この仕事」

入山「思っていないです」

前田「向いてないよお前、はっきり言って」
入山「……」

前田「で、向いてないのがわからないっていうのはさ、もうバカなんだよね。バカかって知ってる？」

ほかのスタッフが笑う。

入山「……」

前田「なんか髪も変だし、店内歩かないでほしいんだよね。ねえ、変じゃない？」

○同・レジ前

店員「お待ちせしました。2年半前に退職された入山さんですね」

入山「はい」

店員「前田さんはですね、現在四国の店舗に移られたんですけど」

入山「え、四国？」

店員「ええ」

入山「……一応、教えてもらっていいですか？」

○大学・ベンチ（翌日）

斉藤と奈月と入山が座ってコーヒーを
飲んでいる。

斉藤「それ飛ばされたんじゃない」

入山「やっぱそうですか」

奈月「パワーハラを誰か訴えたとかで」

斉藤「でも、行ったのはすごいよ。謝らせる
のは難しいだろうけど」

入山「謝らなかったら……トマトをぶつける
予定でした」

斉藤「トマト？」

入山「そいつ、トマトが苦手だったんです。

だからまあ、せめてというか——」

奈月「え、入山さんってそういうことするん
ですね」

入山「いや、はじめてはじめて。でも迷惑系
の人っぽいし……」

斉藤「いいよ、それくらいやる権利あるでし
よ」

奈月「（力強く）ハラスメント野郎がトマト
まみれになるところ見たいです」

斉藤「……ほら」

入山「でも遠いし、さすがにもう」

斉藤「じゃあ一緒に一緒行こうか」

入山「え？」

斉藤「ルールだから、誰かがしたいことは協力するっていう」

入山「でも、これは1人でやることだし」

斉藤「応援応援」

奈月「わたしも応援行きたいです。ハラスメント野郎がトマトまみれになるところ見たいです」

斉藤「……ほら。あと香川って海あるでしょ。ついでに今更行こうよ、海」

入山「……海か」

○公園・コンクリート壁の前（夜）

入山がスマホを耳にかざしている。右

手にはテニスボール持っている。

美樹の声「トマト？」

入山「やめたほうがいいかな」

美樹の声「うーん、いちばん伝えたいことはなんなの？」

入山「なんだろう……あのときは傷ついて何も言えなくて……だからその、何も言えなくても何も感じてなかったわけじゃない、それを伝えたい、間違ってもいいから（テニスボール投げる）」

美樹の声「……わたしも一緒に行っていない？」

入山「（ボールを片手でキャッチしそこねる）え」

美樹の声「応援したい。いいかな？」

入山「うん、心強いよ」

入山、ボールをつかんで見つめる。

○入山の家・リビング（夜）

容子がお茶を飲み隆二が食事しているところに入山が入ってくる。

入山「来週末、友達と旅行行くから」

容子「え？ うそ？」

入山「ほんと、2泊3日」

容子「どこ行くの」

入山「四国、香川」

容子「誰と行くの？」

入山「友達3人と」

隆二「女子いる？」

入山「まあ」

隆二「うわ、大学生っぽい」

入山「大学生だよ」

容子「明日、赤飯にするね」

入山「なんでだよ」

○格安航空機・外観（一週間後・朝）

離陸する。

○同・席（朝）

入山と美樹が並んで座り、後ろに斉藤と奈月が並んで座っている。

美樹「でも飛ばされたってことは、反省してるかもね」

入山「あいつが？」

斉藤「（通路がわに顔を出し）反省はしてなくても、謝りはするんじゃない？」

入山「ああ」

奈月「（立ち）謝っても誠意はないですよ。投げましょう」

入山「バラバラだね」

○格安飛行機・外観（朝）

着陸する。

入山の声「とりあえず、ホテルに行きますか」

○ホテル・部屋（朝）

入山と斉藤が入る。

斉藤「（入るなり）狭いな」

入山「……斉藤さんの実家ってお金持ちなんですか」

斉藤「え？」

入山「住んでる家、いい家だったし」

斉藤「ああ。父親が金持ちで、まあ母親はその愛人って感じ」

入山「ああ」

斉藤「最近の家も来ないらしいけど、俺が子どもときはよく来て、セックスして帰って行くんだよ。気持ち悪いだろ」

入山「いや」

斉藤「でもその金で暮らしてるからな、恥ずかしながら」

入山「……」

斉藤「支配されてるよなー。で、金使う以外に人づきあいできないの、バカだろ」

入山「バカじゃないですよ、そんなこと言わないでください」

斉藤「でも、勝手だけどき、なんか入山の対決を見たら一歩踏み出せそうな気がするんだよ」

入山「……それならうれしいですけど」

斉藤「それ見て、奈月に告白しようかと思ってるんだよね」

入山「あ、そういう一歩？」

斉藤「入山も藤谷さんときあえよ、好きなんだろ」

入山「まあ、はい」

斉藤「よし、戦いの前に腹ごしらえだな」

○うどん店・店内

入山と斉藤と美樹と奈月、黙々とうどんをすすする。

入山、水をとりに立つ。

斉藤「3度目だな」

美樹「緊張してますね」

入山、戻ってきて水を飲み、つゆを飲み干す。

○ファミレス・外観

手に握られたトマト。

トマトをもつ入山を斉藤と奈月と美樹が囲んでいる。

斉藤「確認しておこっか」

入山「呼び出して、駐車場で話します。で、
謝らなかつたらぶつけて、ダッシュで逃げ
ます」

斉藤「逃げるが勝ちだよ」

美樹「休みだったら」

入山「明日も行く。社員なら連続で休まない
でしょ」

入山、ペットボトルの水を飲む。

斉藤「大丈夫。むしろびびるよ。東京から来
たんだもん」

入山「ですよ。行ってきます」

入山、階段を上る。

○同・レジ前

入山と対面する前田（41）。

前田「えっとすいません。どちら様でしょ
う」

入山「昔、東京でバイトしてた入山です」

前田「ああ（覚えてない感じ）、え、おお、
久しぶり」

入山「どうも」

前田「え？ 旅行？」

入山「まあ、旅行でもあるんですけど」

前田「え、でもなんで知ってるの？ 俺ここにいるの」

入山「ちよつとあの、下で話せませんか？」

○同・駐車場

離れて入山と前田をチラチラ見る斉藤
たちを前田が見て、

前田「友達？」

入山「あ、はい」

前田「いいねえ。で？」

入山「……あの……」

前田「なに？ 怖いな」

入山「……なんで、東京離れたんですか？」

前田「ああ、結婚したんだけど、嫁さんの実家こっちでさ」

入山「え？」

前田「帰りたいていって。まあ自分も東京

もういいかと思ったし」

入山「それだけですか？」

前田「子どももいるから、こっちのほうで育てやすいと思ったんだよね」

入山「そうですか……」

前田「え、それだけ？」

入山「……（おびえつつ）その、パワハラじゃないんですか？」

前田「え？」

入山「パワハラで、その、飛ばされたんじゃないんですか？」

前田「いや、パワハラなんてしてないし」

入山「いや……したじゃないですか」

前田「してないよ」

入山「さんざん俺のこと否定して」

前田「ごめん。よく覚えてないけど、指導でちょっと厳しくしちゃったかな」

入山「いや、人格さんざん否定して」

前田「人格って、じゃなんか証拠あるの？」

入山「証拠は」

前田「え、ていうかここまでそれ言いに来たの？ マジで？ 今更？」

入山「……」

前田「旅行楽しみな。ね。え、どっちとつきあってんの？」

入山、ジャンパーのポケットからトマトをつかみだし、前田に投げるが前田がかがんで外れる。

入山「今更？」

前田「（入山と距離をとる）なに、なに、え」

入山「今でもだよ（トマトをもう1個投げますが、外れる）」

前田「あつぶな、何してんだよお前よ！（入山につかみかかり、ヘッドロックする）」
入山、抵抗する。

前田「……思い出した、ほんとにお前使えなかったわ。今もなんもできないんだな」

前田の後頭部にトマトがぶつけられる。
前田は入山から手を離し頭をさわり、

驚いた顔をする。

斉藤が前田を羽交い絞めにする。奈月と美樹が前田の顔にトマトを至近距離で殴るようにぶつけると、前田は激しくえづく。斉藤が手を離すと前田はえづきながら逃げる。

斉藤たちが振り返ると、座り込んだ入山に駆け寄る。

斉藤「大丈夫か」

入山「……みじめだよ」

斉藤「そんなことないよ」

入山「……失敗すると思ってたから、用意してたんでしょ」

奈月「私が持つところって言ったんです。いざというときのため」

入山「信用ないんだな」

美樹「助けたいと思ったら、思わず……」

入山「……これ自分の戦いなんだよ。みんなでトマトぶつけたら、いじめみたいで……」

……」

入山、立ち上がる。

美樹「入山くん、ごめん」

入山「ちよつと無理、一人にさせて」

入山は3人をおいて駐車場をあとにする。

○フェリー・外観

○同・船上

入山が立って海を眺めている。

○海岸

カップルが何組かいる中、入山が一人砂浜に座りこむ。

やがて、入山は泣く。手で目を何度もこするが、涙が出てきてしまう。

入山「ダサい人生だ」

入山のスマホがなる。開くと斉藤からショート動画が送られている。入山は動画を開く。

○ 動画

斉藤はトマトをもっている。

斉藤「間違ってるかもしれない、また気分悪くするかもしれないけど、自分たちをなか、罰したい気持ちで」

斉藤、勢いよく自分の顔に3回ぶつける。斉藤のトマトの汁まみれの顔。

斉藤「すいませんでした（頭をさげる）」

奈月もトマトを3回顔にぶつけ、

奈月「申し訳ありません」と頭を下げる。

美樹から斉藤にスマホがわたり、美樹がトマトを顔に3回ぶつける。

美樹「本当にごめんなさい」と頭をさげる。

自撮りの画角で三人のトマトの汁まみれの顔がうつされる。

斉藤「入山、かっこよかったよ。勇気出た。

だから俺も、言おうと思う」

入山の声「え？」

斉藤「奈月、俺とつきあってくれないか」

奈月「え……ごめんなさい」

斉藤「……入山、だそうだ」

奈月「入山さん、私、勝手に自分の悔しさ、さっきの奴にぶつけてました。すいません

(泣く)」

美樹「……入山くん、前高校の友達に今更謝った話したよね。昔、実は彼女に告白されただよ。でもわたし、嘘でしょ？ って思わずなぜか笑っちゃって、彼女に嘘だよって、そういう苦しい嘘つかせた。ひどいよね、勇気を出して言ってくれた人に。最低で卑怯でダサいからわたし。ごめん、また間違えたよ」

斉藤「入山、今どこにいる？ ちょっとこの空気耐えられないわ、頼む」

○海岸(夕)

入山と斉藤、美樹、奈月の3人が対面する。入山以外顔にトマトの破片がついている。奈月は泣いている。

斉藤「ごめんな」

美樹「ごめんなさい」

奈月「すいませんでした」

入山「そのままの顔でこないでも（笑う）」

○海（夕）

斉藤と奈月と美樹が浅瀬に足先だけ入り顔を洗っている。

入山も海に入ってくる。

入山「つめた。冷たくない？」

斉藤「この冷たさも罰だよ」

入山「もういいですって……いやー、しかし

ね、あんなに外すとは」

美樹「悔しいね」

入山「言葉が全然出てこなかった。いっぱい

言いたいことあったのに全然……」

斉藤「でも立派だよ」

入山「ありがとうございます」

奈月「斉藤さん、そろそろあがりません」

斉藤「え？ みんなで水かけあってキャッキ

ヤ言うのやろうよ」

奈月「今更そういうのいいんで。ね」

斉藤「あ、そう？」

斉藤と奈月、砂浜に向かう。

美樹「（緊張する）……」

入山「そういえば、海、来れたね」

美樹「うん」

入山「あー、ほんと恥ずかしい、あんな姿見られて」

美樹「私は、ひどいでしょ」

入山「自分もちゃんと答えられるか自信ない

よ」

美樹「入山くんは、ちゃんと答えると思う」

入山「いや、そもそも告白なんかされたこと

ないから、ピタッと止まっちゃうと思う

よ」

しばし沈黙が流れたあと、

美樹「わたしと……つきあってくれませんか」

か」

入山、ピタリと止まる。

○砂浜（夕）

齊藤と奈月が座りながら入山と美樹が
海水をかけあうのを見ている。

齊藤「ほらほら、やってるじゃんあれ」

奈月「あれはカップルがやるもんなんです
よ」

○海（夕）

入山「今更じゃない」

美樹「え？」

入山「俺たちは今からだよ」

美樹「うん、なんか恥ずかしいけど」

海水をばしゃばしゃかけあう入山と美
樹。

○大学の図書館・外観（数日後）

○同・書架

入山が労働問題の図書が置いてあるコ

―ナーを見ている。

○同・席

入山が席に座り、読書している。傍らには何冊も本がある。

×

×

×

宙を見上げる入山。

○ファミレス・レジ前（数日後）

店員「いらっしやいませ、あ」

入山「あの今更ですけど、もう1つ聞きたいことがあって」

店員「はい」

入山「僕、前田さんからパワハラを受けていたんですね」

店員「あ、え、はい」

入山「で、それをどうしても証明したいので、お聞きしたいんですけど――」

○入山の家・リビング（夜）

食卓に入山と慎と容子が座っている。

入山の前にはノートパソコンがある。

容子「え？ 大学院？」

入山「研究したいことを見つけたから」

慎「……なにを研究したいの」

入山、パソコンを父と母に向ける。

○大学・正門（数ヶ月後）

文化祭の看板がでている。

○同・教室

広くないスペース。入山と増田と奈月の発表用の模造紙が貼られている。

模造紙が張られていない窓側を入山と

奈月と増田が立って見つめている。

増田「斉藤さん、ほんとに今更大学辞めちゃったんだ」

入山「うん」

増田「留年でやめるって最高の今更」

奈月「わたしが」

入山「いや、違う。今更親に反抗してみたくなったらしい」

増田「いま、なにしてるの？」

入山「とりあえず、今更はじめてバイトをしてるって」

増田「今更だなー」

○ファストフード店の前

デリバリーの格好をした斉藤が店内から出てくる。バイクに乗ろうとすると、き斉藤はスマホを取り出して耳にあてる。

斉藤「はい、承知しました（スマホ切る）。

今更言うなよ」

斉藤、店内に戻る。

○大学・教室

増田が模造紙の前に立ち、数人の見物客の前で発表している。

奈月が模造紙の前に立ち、数人の見物

客の前で発表している。

入山が模造紙の前に立ち、数人の見物客の前で発表している。

美樹が入山の発表を写真に撮っている。

○ファミレス・席

本部社員（55）と前田が向き合って座っている。

本部社員は紙の束を前田に示す。

本部社員「本部にある報告が届いてね」

前田「はい」

本部社員「君がこれまで働いていた店舗で君からパワハラを受けたというスタッフの計6名から、その詳細が報告された」

前田「え？ でも」

本部社員「（前田の発言を止め）今の店舗スタッフにもヒアリングして十分な疑いが得られたので、スタッフ同意のもと休憩室にカメラを設置した」

前田「いや、パワハラなんか」

本部社員「君がそう思っていないだけで、あれはどう見てもパワハラだね」

前田「……」

○大学・教室

入山「今回の経験からハラスメントの研究を大学院でしようと思いました。以上で発表は終わりですが、なにか質問ありますか？」

おずおずと男子高校生（18）が手をあげる。

入山「どうぞ」

高校生「あの、ぜんぜん勉強してなくて、こけっこう難関校だと思うんですけど……今更でも勉強したら現役で合格できると思いますか？」

入山「できますよ。今更でも本気になれば」

高校生「ありがとうございます！ 明日からアルファベット覚えます」

入山「や、ちよつと今更すぎるかも。いや、

わかんないけどね」

変な空気になる。

入山の後ろの黒板に貼ってある模造紙が
ばさっと落ちる。

○タイトル「IMASARA」

黒板にチョークで書かれている。

(了)